補　論

農村開発についての整理

補論:農村開発についての整理

1. はじめに

今回の調査対象となった「貧困層のエンパワーメントを通じた住民参加型農村開発」(以下、「貧困層のエンパワーメント」)と「住民参加型農村開発行政支援プロジェクト」(以下、「行政支援プロジェクト」)は、JICA の援助スキームは異なるものの、ともに女性の参加を促す住民参加型の農村開発プロジェクトであった。これらは住民がプロジェクトの単なる裨益者であるばかりでなく、自ら主体的に参加し、自ら考えてプロジェクトを運営していくことを目的としているもので、女性のエンパワーメントの面からも適合的なプロジェクトである。調査した2つのプロジェクトは同じ住民参加型で共通点を持っている一方で、その活動内容を分析してみると、それぞれ異なる特質を持ったプロジェクトであることも明らかになった。ここでは、この2つのプロジェクトの共通点と相違点を整理することで、住民参加型プロジェクトにおける2つの類型を呈示したうえで、ジェンダー主流化との関連性について考察する。

2. プロジェクトの共通点

共通点は(1)IRDP(総合農村開発)手法の継承、(2)女性グループの組織化、(3)女性オーガナイザーによる指導の3点である。一方、大きな相違点は(1)住民がプロジェクトに参加するインセンティブ、(2)グループ形成(人数や地域との関係)の論理、(3)プロジェクトのネットワーク化の志向性の 3 点である。

共通点の1点目はスリランカ等での農村開発プロジェクトで主流であった手法の「バ」国農村開発への適用事例といえる。今回の2つの調査対象プロジェクトは技術訓練、識字教育、道路やトイレの建設など、さまざまな分野を同時に進行させる総合農村開発の手法を採用しており、この点では非常に共通性の高いプロジェクトである。

共通点の 2 点目は「バ」国における農村開発によくみられる点であり、ショミティを核とした農村開発でこれまでに多くの成功事例がある。3 点目の女性オーガナイザーによる指導は重要である。農村地域ではまだまだ男女それぞれに活動する分野が分かれていることが多く、家族以外の異性とコミュニケートする機会は限られている。また女性は妊娠出産など男性と異なるライフイベントがあり、女性が参加する開発プロジェクトの進行にあたっては女性の生活環境への十分な配慮が必要である。これまでともすれば、指導者は男性が中心であったが、女性グループの組織化にはまず女性指導者(フィールド・オーガナイザー)の育成が不可欠である。今回の調査で着実に女性による指導が進んでいることがうかがえた。女性の指導者(フィールド・オーガナイザー)の職歴も尋ねたが、以前は別の NGO で働いていたというケースがみられ、NGO は女性指導者の育成機能ももっていることが明らかになった。

農村開発の分野では、女性指導者の人数は男性に比べて少ないのが現状である。リプロダクティブ・ヘルス関連のプロジェクトが女性のみのフィールド・ボランティアですすめられている点とは大きく異なっている。今後は、女性指導者のキャリア形成および人数の確保の面で、前述の女性農業研修センターの研修および NGO での業務を有機的に連関させることも必要であろう。農村開発の分野でジェンダー主流化を実現するには、女性指導者の質的・量的確保をより体系的にすすめていくのがその前提条件になると思われる。

3. プロジェクトの相違点

次に、今回の調査で明らかになったプロジェクトの相違点について考察する。まず、1点目の参加インセンティブとしては、「貧困層のエンパワーメント」が、経済的な側面を重視しているのに対して、「行

政支援プロジェクト」は社会的な側面を重視している。具体的には前者は「バ」国での農村開発の成功事例であるグラミン・バンクの手法を取り入れた共同積立金やマイクロクレジットへの参加、およびミシン操作などの所得創出につながる職業訓練を、女性のグループ活動の柱として導入している。これに対して、後者は意図的に共同積立金とマイクロクレジットを導入せずに、女性どうしのコミュニケーションの場の確保、住民自身によるトイレの建設など生活環境の整備などが活動の柱となっている。これは、所得創出はもちろん重要な課題であるが、女性のグループ形成の場合、まずは家族内や親しい仲間に限られていたコミュニケーションの機会をひろげ、自分自身が開発プロジェクトに参加しているという意識の醸成も必要であるという運営者側の判断による。経済的インセンティブによる参加促進は、その後の活動の成否によって融資資金の返済状況や活動展開の面で、個人個人の間に大きな格差を生む可能性もある。また農村部の女性がこれまで、農産物や加工品の販売に携わる機会が限られていた現実もある。そのために、経済的なインセンティブに特化しない手法を導入することで、まずは女性の仲間意識を形成し、共通の社会的関心を惹起し、女性の集団的なエンパワーメントを図ることを目指している。

2点目のグループ形成（人数やコミュニティとの関係）の論理については、グループ形成がプロジェクト・オリエンテッドなのかコミュニティ・オリエンテッドなのかという相違点によるところが大きい。「貧困層のエンパワーメント」が導入しているプロジェクト・オリエンテッドとは、あらかじめ決められた一定の参加人数と活動メニューでプロジェクトを進め、同じ地域のなかで参加希望者が多い場合は、また別のグループを形成することで、プロジェクトをすめていくものである。この手法では、グループ管理が標準化しやすく、グループ活動のパフォーマンス（実績）も把握しやすい。一方、「行政支援プロジェクト」が導入しているコミュニティ・オリエンテッドとは、参加人数を制限せずにコミュニティをベースにグループ形成を図り、活動内容も参加者の話し合いの過程の中から決定していくようなワークショップの手法が重視されている。この手法では、住民の主体的な参加と地域社会での「仲間意識」の形成が容易であり、プロジェクト活動だけでなくコミュニティ活動として、地域行政システムとの連携が可能である。

3点目のプロジェクトのネットワーク化の志向性については、「貧困層のエンパワーメント」が、ダッカの本部が中心（ハブ）となり地方で展開するプロジェクが放射状に並ぶような形で中心－部分間のリンケージを図るタイプであるのに対して、「行政支援プロジェクト」はプロジェクトが展開する各地域間やコミュニティ間の連携を本部が促進していくような水平的なリンケージを図るタイプである。前者は、各プロジェクトからの情報提供により、本部がコントロールして、競争的な視点からプロジェクトを評価し、その情報をプロジェクトにフィードバックすることで、プロジェクトの効率を高めていくことが可能である。後者は、各プロジェクト間の情報交換により、本部がプロジェクトをコーディネートする役割を果たして、協調的な視点からプロジェクト間の情報交換の密度と頻度を高めることで、プロジェクトの効率を高めていくことが可能である。以上の共通点と相違点を図示すると表のようにまとめることができる。

表 2つのプロジェクトの類型化

	貧困層のエンパワーメント	行政支援プロジェクト
援助スキーム	開発パートナー	専門家チーム派遣
協力団体	シャプラニール	京都大学東南アジア研
アプローチ	プロジェクト・オリエンテッド	コミュニティ・オリエンテッド
住民がプロジェクトに参加するインセンティブ	・経済的な側面を重視 ・共同積立金 ・マイクロクレジット ・ミシン操作などの所得創出につながる職業訓練	・社会的な側面を重視 ・女性どうしのコミュニケーションの場の確保 ・ 住民自身による生活環境の整備（トイレ）
グループ形成の論理と運営手法	・あらかじめ決められた一定の参加人数 ・参加希望者が多い場合、別グループを形成 ・標準化された活動メニュー	・ 参加人数を制限せずにコミュニティをベースにグループ形成 ・ ワークショップの手法を重視した活動内容
ネットワーク化の志向性	・中心－部分間のリンケージの形成 ・本部が中心（ハブ）となり地方で展開するプロジェクが放射状に並ぶ	・水平的なリンケージ形成 ・プロジェクトが展開する地域間やコミュニティ間の連携を本部がコーディネート
プロジェクト運営上のメリット	・共通の評価基準によりグループ管理を標準化しやすい ・プロジェクトからの情報提供により、本部がコントロールできる ・競争的な視点からプロジェクトを評価可能 ・本部からの情報のフィードバックで、プロジェクトの効率を高める	・ 住民の主体的な参加と地域社会での「仲間意識」の形成が容易 ・ コミュニティ活動として、地域行政システムとの連携が可能 ・ 協調的な視点から各プロジェクトを連携 ・ 情報の交換密度と頻度を高めることで、プロジェクトの効率を高める

4. ジェンダー主流化およびプロジェクトの効率性からみた2つの類型

ここで重要な点は、どちらの進め方が優れているかということよりも、対象となる住民の状態、あるいは経済的社会的環境を十分考慮し、それに応じて、導入する進め方を選択することが、ジェンダー主流化・ジェンダー配慮からも、プロジェクトの効率性の点からも効果をより高めることにつながるという点である。つまりそれぞれの進め方には、メリット、デメリットがあるので、ジェンダー主流化・ジェンダー配慮からみて共通のベースラインを確保したうえで、プロジェクトの効率性の点から導入すべき手法を選択することが必要になる。

(1) ジェンダー主流化・ジェンダー配慮からみた共通の留意点

まず、ジェンダーの視点から考察すると、共通のベースラインとしては、プロジェクトの運営者として女性指導者を十分確保できているか、運営の方針決定に女性指導者の意見が十分反映されているか、指導活動にあたって女性指導者の移動手段や安全性は十分確保されているかという点が重要である。また参加者としては、プロジェクトに参加することで過重な負担をしいられていないか、加入について社会的慣行による制約が加えられていないか、参加することが経済的なメリットにとどまらず女性の自己実現に寄与しているかどうかが重要な点である。例えば、識字力をつければ、共同積立金やマイクロクレジットの帳簿にサインができるようになり、プロジェクトの中心であることが多い経済的活動への参加の途が開かれるというメリットが生じる。しかし識字力はより大きな自己実現を可能にする能力でもある。識字能力の向上は、開発に関連するさまざまな情報を入手する(読む)ことを可能にして、それらの情報の中で自分自身に便益をもたらすものへ自発的にコミットしていくことを可能にする。女性が農産物や製造品を自分自身で販売する機会が事実上制約されている状況を考えると、女性に対して、サインができることでマイクロクレジットに参加できるようになるというインセンティブだけでは、女性のエンパワーメントに着実につながるとは必ずしもいえない。識字教室で学習する際にも、識字力が身につくことでもたらされるメリットをどのように想定しながらすすめていくかという配慮が必要である。

(2) プロジェクトの効率性からみる2つの類型の特徴

次に、これらの点をふまえて、プロジェクトの効率性の点から、2つの類型を考察する。

女性住民のエンパワーメントの向上に対して経済的なインセンティブが有功であると判断される場合は、一定のメンバーを対象とする共同積立金やマイクロクレジットを導入するプロジェクト・オリエンテッド・アプローチが有効である。地域における社会経済的環境が地域の女性の経済活動を制約していることが十分に想定される場合は、まず女性の経済活動を促進していくために、標準的な運営方式による経済的なメリットを実現できるアプローチが有効であろう。この方法で、当該地域あるいは他の地域で成功例が誕生すれば、それを紹介することで周囲に対して成功例がロールモデルとなり、女性の経済活動の進展を相乗的に図ることができる。また標準的な情報のやりとりにより、自分たちの状況が全体のなかでどのような位置(レベル)にあるのかを把握することも可能である。

一方、これまで地域の開発に対して当事者としてかかわる機会がほとんどなかった農村女性に対して、まずその場を提供することが必要と判断される場合は、集団としての凝集性が高いコミュニティ・オリエンテッドの開発手法は有効であるといえる。もちろんそのためには、コミュニティの活動や意見を尊重するような制度的な行政システムづくりが不可欠で、地方行政組織の整備とともに活動をすすめていくことが必要である。労働や経済的な活動には参加しているものの、行動面での社会的な制約が多く、意思決定場面への参画や、グループ形成の機会が少ない農村女性のエンパワーメントを実現する場合、教育や職業訓練によってひとりひとりの女性のエンパワーメントを実現するとともに、女性がたがいに連携して、連帯感、一体感を実現していくことで、集合的な女性のエンパワーメントにつなげてい

くことも大切である。そのために水平的なリンケージを図るには本部のコーディネート機能がカギになってくる。情報交換の一定の密度と頻度を確保し、本部からの指示という形態だけでなく、積極的に各プロジェクトのメンバーが直接会って情報交換できるような場の確保が必要である。セクターワイドアプローチの進展の面からも、プロジェクト・コーディネート機能の強化が一層必要になってくると思われる。

添付資料

略語表･語彙説明

BRAC	バングラデシュ現地 NGO
BRDB	Bangladesh Rural Development Board バングラデシュ農村開発公社
CIDA	Canadian International Development Agency カナダ開発庁
CDC	Community Development Center シャプラニールの支援機関
CORHP	Community-operated Reproductive Health Project リプロダクティブ･ヘルス地域展開プロジェクト社会開発 (JICA 開発パートナー事業)
DANIDA	Danish International Development Agency デンマーク開発庁
ESP	Essential Service Package 「バ」政府の保健医療基本サービスパッケージ
FPAB	Family Planning Association of Bangladesh
FDV	Family Development Volunteer シャプラニールの村落家族計画普及ボランティア
FP	Family Planning
FWV	Family Welfare Visitor
HPSP	Health and Population Sector Program
HRDRH	Human Resources Development in Reproductive Health リプロダクティブ･ヘルス人材開発プロジェクト (JICA プロジェクト方式技術援助)
JOICFP	Japanese Organization for International Cooperation in Family Planning 日本の NGO。家族計画関連プロジェクトを世界各地で実施している。
JSRD	農村開発実験プロジェクト
MCHTI	Maternal and Child Health Training Institute MCHTI 母子保健研修所 (JICA プロジェクト方式技術援助)
MR	月経調節法 (初期の合法的な中絶)
PLAGE	Policy Leadership and Advocacy for Gender Equality
PLAU	Policy Leadership and Advocacy Unit
PRDP	住民参加型農村開発行政支援 (JICA プロジェクト)
RH	Reproductive Health
SSC	Secondary School Certificate 中等教育修了資格証
TFR	Total Fartility Rate 合計特殊出生率
UBINIG	Policy Research for Development Alternative バングラデシュ現地 NGO
ウポジラ	日本の郡にあたる (Upazila)
ポリショド	地方自治体における評議会
ユニオン	行政村

バングラデシュ「開発とジェンダー」現地調査

調査結果

訪問先	女性子ども問題省女性問題局（水野桂子専門家配属先）
面会者（役職）	Ms. Begum Touhida Faruki（局長）
面会日時	2002年3月28日　10:20～11:00
面会場所	女性問題局局長室、ダッカ
訪問目的	• 女性問題局のジェンダーメインストリーミングとジェンダーの取り組みについて • バングラデシュにおける女性問題について

調査結果要約：

- 女性子ども問題省は、これまで国連女性年の動きと、バングラデシュ政権の変動に対応するように、組織改編、昇格、統合が行われた。援助ドナー国、国際機関を意識した名称と考えられる。
- バングラデシュ政府は第5次5カ年計画における女性と開発の分野において、開発のメインストリームに女性の参加を通じてジェンダーの不均衡を無くしていくことを強調している。主な目標として、生産の自営の機会を生み出すこと、教育や職業訓練の優先化、マイクロクレジットの利用を通じた女性の権利の保護、女性のエンパワーメント、女性の貧困的状況の削減を挙げている。開発の主なプログラムは、①職業技術研修プログラム、②女性子ども問題省・女性問題局・国立女性協会の職員能力強化プログラム、③女性子ども問題省における政策とアドボカシーユニットの設立、④女性への貸し付けプログラム、⑤Vulnerable Group Development プログラム、⑥働く女性のための居住支援、⑦働く母親のための保育施設サービス、⑧女性への暴力削減対策横断的プログラム、⑨職業技術訓練センター、⑩ジェンダーに敏感なデータベースの開発、⑪人身売買防止プログラムである。
- 女性問題局は、上記政策を実施するための機関であり、女性の地位向上のための国内本部機構である。主な目標として、女性の諸問題と「女性と開発」に関わるプロジェクトを行うことであり、登録した女性の NGO への協力と指導、貧困女性のための食糧とトレーニングの提供、女性と子供を抑圧から防ぐための啓発活動と暴力の被害者への支援等である。
- 地方における女性の立場については、地方では特に女性の立場が弱く、エンパワーメントが必要である。また、宗教・社会の問題が色濃く出る場合が多い。
- 都会においては、女性が経済的な自立をすると家族における発言権も増す傾向が見られる。
- 女性の管理職の数は、大臣が2人、局長レベルでも2～3名のみである。女性の管理職の割合は約10％～15％。理想は50％になること。
- 女性が大臣や管理職になると女性問題に理解が増えると考えられる。

特記事項	• 局長は現職に就任して1ヶ月のため、詳しい現在のジェンダーに関する状況について、明確な意見を得ることができなかった。 • 問題点などは抽出されているし目標もあるが、それらの問題をどのように解決し、目標をどうやって達成するかの具体策が聞かれなかった。
入手資料	• 女性問題局概要 • WID 関連統計 • バングラデシュ国家5カ年計画における WID 関連分野計画 • LCG グループ・バングラデシュにおける協力（英文） • 汚職に関する記事（2001年6月）

訪問先	女性子ども問題省女性問題局 Policy Leadership and Adovocacy Unit (PLAU) Policy Leadership and Advocacy for Gender Equality （:PLAGE、CIDA プロジェクト）
面会者（役職）	Dr. S.M. Ali Akkas（PLAU 合同室長、PLAGE プロジェクト責任者） Ms. Krishna Chanda（PLAU 副室長） Ms. Nurun Nahar Begum（PLAU シニアアシスタント室長）
面会日時	2002年3月28日　11:15～12:15
面会場所	女性子ども問題省内　PLAU 内会議室、ダッカ
訪問目的	PLAU の役割とグとジェンダーの取り組みについて CIDA との連携について

聞き取り調査要約：

- PLAU の役割は、CIDA との連携プロジェクト（PLAGE）の実施担当室として、バングラデシュで実施されるすべてのプログラムと市民社会の中で、ジェンダー平等を実現することである。その実現のために、女性子ども問題省のキャパシティーを強化し、女性の要求に対応する政策を提言し、プログラムを提案することが目標である。
- PLAGE プロジェクトは①女性子ども問題省、②他のバングラデシュ国家組織（他省庁など）との連携、③市民社会を代表する組織（NGO や女性アクティビスト等）との連携、を推進している。これにより、マクロレベルの政策とグラスルーツレベルの連携を可能にする。
- 8セクター（農業、教育、環境、健康、産業、メディア、IT、村落開発）におけるプロジェクトへの女性の参加についてのハンドブック（チェックリスト）を作成した（Handbook On Gender Equality Planning Tools）。このツールの使用方法について、各省庁において研修を行っている。このツールは、また、ジェンダー別のデータを集めるのに役に立つ。
- 他の22省庁や地方行政府（タナ）と共に女性をターゲットとするプロジェクト一覧表を作成した。
- National Council for Women Development, WID Focal Point Coordination Committee, WID Focal Point Networking Committee を通じて各省庁と連携している。
- 計画省が全体の計画とモニタリング、評価を行う。が、PLAU は、それらの評価が実施される際に、ジェンダーの視点からみたアドバイスを行う。
- PLAU のオフィサーの人数は少ない。4人のオフィサー（うち1名は空席）、その他アシスタントやコンサルタントなど数名がいるのみである。
- CIDA からの拠出金により PLAGE プロジェクトは実施されているが、人員はすべてバングラデシュ人である。
- 図書資料を収集し、知識の共有化も図っている。

特記事項	• ハンドブック（ツール）内容については、後日分析し、JICA で使用できる部分を報告書の中でリコメンドする。 • プロジェクト一覧表については、女性ダイレクトとインダイレクトのもの2冊がある。 • 実際のプロジェクトを実施する際に、ジェンダーの視点がどこまでグラスルーツレベルに落ちるかは疑問である。特に、バングラデシュでは郡レベル（30万人）でしか行政機構がないからである。この点に関しては、今後の現地調査で確認する。
入手資料	• Handbook on Gender Equality Planning Tools • Project Profile, Women Development Project（2000-2001 RADP） • Project Profile, Women Development Project　(Partial)（2000-2001 RADP） • Policy Leadership and Advocacy for Gender Equality (PLAGE)：プロジェクト概要 • Documentation and Resource Center 概要 • Gender Glimpses (Highlights on PLAGE Policy Researchers) (Special Issue) • Beijing Update • Utilization of Job Quota Reserved for Women：　関連資料

訪問先	女性子ども問題省女性問題局　女性への暴力対策プロジェクト（DANIDA）
面会者（役職）	Ms. Suss Schaumann（チーフテクニカルアドバイザー） Md.Nurul Abedum（プロジェクトディレクター） Ms.Kazi Momata Hena（プロジェクト副ディレクター）
面会日時	2002年3月28日　12：20～14：00
面会場所	女性子ども問題省内プロジェクト会議室、ダッカ
訪問目的	• 「女性への暴力対策プログラム」の概要について • DANIDA のジェンダー主流化について

調査結果要約：

- プロジェクトは2年間のパイロットプロジェクトとして開始され、2002年の6月に終了する。が、その後、本格プロジェクトが5年間の予定で開始される。
- DANIDA はプロジェクトの自立発展性を重視しており、予算的には、人件費と車両、機材のメンテナンス費用等（約 2,000 千円）がバングラデシュ政府負担で、機材、トレーニング、交通費、研修旅行など（約 2,100 千円）は DANIDA が拠出している。
- One Stop Crisis Center（OSCC）がダッカとラッシャーと県（北西部インド国境近く）にある。このセンターは、女性に対する暴力が行われた後、暴力を受けた女性に対してその対応を行うために設立された。バングラデシュにおける女性への暴力は、家庭内暴力、誘拐、人身売買、レイプ、殺人などがある。OSCC は具体的には、暴力を受けた女性が緊急治療を受けること、起訴に必要な法的アドバイス、警察の捜査に対する支援（レイプされた際の医学的証拠の採取など）、心理カウンセリングを行う。DNA テストに必要な設備も備わっている。この設備はバングラデシュで初めてのものである。
- DANIDA は当プロジェクトにおいて、人権擁護とグッドガバナンス（良い統治）を目標に掲げている。
- 2000年に向けての DANIDA の女性支援への政策は、女性の教育、健康、収入向上、法的権利における立場の弱さを指摘し、女性の権利を高め、特に女性に対するあらゆる形の暴力に対して闘うことである。
- バングラデシュにおける DANIDA の女性と開発に関連するアプローチは、政策策定、国家計画の策定、女性子ども問題省のキャパシティービルディングであり、また、農業、飲料水、公衆衛生、農村インフラなどのプロジェクトにジェンダーの視点を組み込むことである。

特記事項	• 当プロジェクトは「問題対応型」であるが、女性への暴力が多いことが、女性が外に出かけたり働くことを制限する社会状況にあり、ジェンダー主流化にとって重要である。　しかし、ジェンダー主流化という視点についてはあまり説明されなかった。
入手資料	• Multi Sectoral Program on Violence Against Women（プロジェクト概要） • Multi Sectoral Program on Violence Against Women（プロジェクトドキュメント） • Multi Sectoral Program on Violence Against Women（プロジェクトプロフォーマ） • Multi Sectoral Program on Violence Against Women（プログレス・レポート）

訪問先	バングラデシュ女性農業研修（現地国内研修）
面会者（役職）	宮島秀夫（OISCA バングラデシュ開発団・団長） 鈴木伸司（OISCA 農業及び研修管理専門家） Ms.Selina Akhar（女性農業研修実習指導員） Ms.Halima Khatun（女性農業研修農業・稲作指導員） Ms.Onu Marak（女性農業研修裁縫指導員）
面会日時	2002年3月30日　10:00～12:00
面会場所	バングラデシュ女性農業研修センター、サバール事務所
訪問目的	● 「バングラデシュ女性農業研修センター」の活動概要について ● 研修指導員へのインタビュー
調査結果要約：	

- 当研修センターは女性子ども問題省女性局が運営するテクニカルトレーニングセンターである。1985年に同研修センターの主管が女性局に移管され、2001年1月からJICAが現地国内研修として研修費用の支援を始めた。
- 女性研修は、1984年の募集に応募してきた女性に呼応し、男性の研修に混ざる形で始まった。正式な女性研修は1988年に開始された。
- 募集は新聞への募集広告掲載と、女性局の支所で応募要領(General Information : GI)を配付する方法がある。現在、当研修センターに入るにはSSC(Secondary School Certificate)が必要である。毎募集時期約80名から100名の応募があり、そのうち30名を選抜する。研修の受講者は20歳前後である。
- 女性研修の内容は、稲作、野菜(果樹を含む)、養鶏、養魚(淡水)、食品加工・調理、裁縫の6科目。それぞれが6ヶ月コースとなっている。また、保健衛生とリプロダクティブ・ヘルス、WID、酪農は外部講師による講義がある(実習はない)。研修全体で見ると、実習8割、講義 2 割となっている。研修は集団合宿制で1コースが30名。参加費用は無料である。
- 指導員は全部で7名、そのうち女性6名、男性1名。公務員は5名で、その他 2 名は JICA の現地国内研修費で雇用している。指導員の給与は、基本給が2,550タカで、毎年145タカづつ昇給する。住居費や諸手当を全て含めると月給は4,700タカになる。しかし、給与のうち、年金として500タカ政府に戻している。講義担当者も実習を担当するのが、バングラデシュでは珍しいアレンジである。
- 女性農業研修センターの隣には男性研修センターがある。この男性研修の内容は、稲作、野菜、養鶏、養魚(淡水)、果樹、農業機械の6科目となっている。
- 男性研修と女性研修の違いは、男性研修は農業後継者育成を目標にしているのでレベルが高いが、女性コースでは受講者が初めて農業を体験する人が多く、家庭菜園のレベルである。女性研修では共同作業をすることによって協調性を学ぶことを目標としている。また、男性と女性の研修内容が違う理由は、体力的に女性が劣るのも理由の一つである。
- 男性研修センターの職員の給与もほぼ同じ(ただし、OISCAによる給与)。
- 女性コースの指導員は生徒と同じ場所に泊まっているので、女性の方が良い。男性コースの指導員は男性のみ。
- 女性がこの研修センターで研修するメリットは、政府の修了証が出るので、お金が借りやすくなる、という点がある。また、研修を終えた人たちには、NGOの女性農業研修指導員になる人もいる。
- 女性の農業指導をしていて興味深いことは、野菜作りが栄養指導と調理実習という様に実用的な面につながっていることである。男性の場合は技術の修得に集中してしまう。女性は生活の一部として農業を学んでいる点が良いと思う。
- 農村において、農業は男性のみが行っているのではなく、女性、特に貧しい女性も行っている。畜産も同様である(牛、鶏の飼育)。しかし女性の場合は、それらの活動が「農業」としてではなく「家事」として考えられている。薪を取るための林の維持(林業)も女性の仕事と考えられている。
- これまでの研修の修了生の例として、家の庭でトマトを生産し、養魚をし、販売もしていた22～23歳の女性がいるが、実際のマーケットでの販売は父親が行うなど、売買に関して女性は直接関与することができない、という問題点がある。
- 昨年の受験者は(水野専門家が面接官を行った)66人中30人合格。受験の動機としては、日本に行きたいということも含まれていると考えられる。(水野専門家談)

- 女性研修生から本来研修になかった農業機械の操作を修得したいという要望が出され、ハンドトラクターの運転を教えたこともある（希望者のみのオプション）。女性にはできないと思いこんでいても、実際はできることがあるという例である。
- 研修においては、男性と女性の違いを意識しすぎない方が良い。外部や他の人に対して透明性が高い形で指導、相談を受けるよう配慮している。例えば密室での会話を避ける等。
- ここ10年で、バングラデシュの女性が外に出る機会が増えた（工場で働く女性が増えたためと考えられる）。
- 農業をやっていない都会の女性の方がはきはきしていて、やる気がある。面接で合格するのは都会の「チャンスをつかみたい」女性が多い。
- 研修を通じて女性の顔つきが変わり、次の作業の段取りができるなど、計画性が増す。
- 女性への研修をしていく目標は、中間層の形成である。当研修センターで研修を受けて村に行き、一人でリーダーシップを取るのは難しいので、NGO の指導員として活動できればよい。
- 男女を併せた研修センターの敷地は全体で4ha で、農産物は OISCA マーケットで販売している。
- セキュリティーに十分配慮して研修を行っている。女性が集団で研修を受けることが珍しいので、十分安全配慮した運営を行っている。

研修指導員個別インタビュー

Ms.Halima Khatun（37歳、女の子一人（7歳）あり）

- 1985年に男性の研修の募集を見て応募した。1年間男性と一緒に研修を受講した（当時は1年）。宿舎も男性の宿舎の一角に女性用の宿舎を建設し、そこに宿泊した。
- 研修を受ける目的は、女性クラブ（NGO）で教えることだった。（研修開始前にその NGO で働いていた。カナダの NGO である。）
- 研修を受けて良かったことは、家で忙しく家事・仕事をしていても男性は評価しないが、研修を受けてお金お稼ぐようになったら、評価が高くなったことである。

Ms.Onu Marak（35歳、女の子二人（4歳と10歳）あり）

- 高校を卒業してから約9ヶ月教員をしたり、CARE で働いたりしていた。祖父が募集広告を見て受験することを奨めた（他の女性に農業を教える目的で）。
- 1985年、Halima と同じ時期に男性と一緒に1年間研修を受講した。
- 男性と一緒に研修を受けたことによって、技術を身につけるのに役にたった。

Ms.Selina Akhtar（32歳、女の子一人（9歳）あり）

- 1989年に研修に参加した。祖父が奨めて応募した。
- 目的はここで勉強して他の NGO に入ることである。
- バングラデシュでは女性は男性より低く見られているので、女性が勉強することは良いことだと思う。
- 研修を受けて良かったことは、これまでは男性と話すことが許されなかったが、男性研修生と話せるようになり、研修の外でも男性と話せるようになったので、自信がついた。

全員例外なく自分の娘に勉強させたいと言っていた。勉強することによって将来の選択肢が拡がると考えている。

特記事項	研修プログラムの内容については、主に OISCA の専門家からの聞き取り。研修指導員3名は日本での研修を経験している。
入手資料	なし

訪問先	「貧困層のエンパワメントを通じた住民参加型農村開発計画」(開発パートナー事業) シャプラニール Community Development Center1
面会者(役職)	Md.Fazlul Karim (Field Organizer, Male32, BA) D.M.Shalahuddin (Program Supervisor, Male 30, B.Sc) Md.Sirajul Harim (Accountant, Male, 33, M.Com) Md.Monnafali Prodhan (Field Organizer, Male, 32, B.S.S.) A.K.M.Abdui Rouf (Field Coordenator, Male, 36, M.A. in Political Science) Ashrafun Nahar (Field Organizer, Female, 31, B.Com) Israt Jahan (Field Organizer, Female, 22, H.S.C.) Kalpana Rani (Field Organizer, Female, 31, B.A.) Mohammad Shahnewaz (Field Organizer, Male, 30, M.Com) Md.Harun-or-Rashid (Field Organizer, Male, 23, B.Com) Ms.Jorna (Field Organizer, Female, 33)
面会日時	2002年3月30日 18:30～19:00 2002年3月31日 9:30～10:50、14:00～14:20
面会場所	シャプラニール Community Development Center (CDC) 1
訪問目的	● プロジェクト概要について ● プロジェクト実施者インタビュー

調査結果要約:

- シャプラニールは CDC を通して住民への支援を実施している。
- CDC の目的は、経済的に貧しい住民が自立するための援助を行うことである。具体的には、村人の家族･家計の状況調査を行い、ショミティ(組合)の形成に役立てている。
- ショミティには男性のショミティと女性のショミティがあり、ショミティ全体では132(1,799人)、男性ショミティが74(1,073人)、女性ショミティが58(762人)ある。
- ショミティ活動として、識字学級の建設及び運営(識字学級のコース終了後は、建物を集会所として使用するケースも多い)、トイレ建設、マイクロクレジット、公立小学校を卒業するための補習教室の設置と運営を行っている。
- CDC では、ショミティが自分たちのお金を使ってどのような活動をすべきかアドバイスをしている。例えば、牛の飼育方法を教えたり、自分のためだけでなく周囲の人のために働く、たとえば人件費なしで道路の整備をするなどのアドバイスを行っている。
- 各ショミティでは、参加者が週5タカの積立てを行っている。このお金を CDC スタッフが集金し、管理している。
- ショミティは3年経過すると銀行ショミティになることができる。銀行ショミティになると、CDC から個人に対し資金の貸し付けを行うことができる。銀行ショミティの数は、女性が23、男性が17。
- 女性ショミティは男性ショミティのような活動ができないところが多く、お金を集めるだけという所もある。牛を飼育したりトイレを作るというのは男性の役割だからである。
- 自助ショミティが15ケ所あり、そこではお金を借りて、牛を飼ったりミシンを買ったりしている人たちがいる。機材を購入する前には3ヶ月のトレーニングを受ける。ミシンは26～27台(一人につき1台)購入された。1台3,000タカ以上する。10%が女性ショミティの負担、個人は払えるだけ、また、不足分は CDC が貸す。また、一つのショミティで購入できるのは1台限り。ミシンを買った人が自立するまで他の人は買うことができない。
- 牛の場合は3,000タカから6,000タカ以上する。飼育のトレーニングをして、牛乳を売ったり、育てて販売する。牛が死んだ場合に備えて保険をかける。
- 女性の地位については、女性どうしではできないことがあるので男性が助けないといけない。具体的には、女性はバザールに行って牛を売買できないので、男性が行う。これは宗教的なことなので、変えるのは難しい。ただし、牛の飼育トレーニングは男女一緒にやっている。
- 女性に生まれて損と思ったことはない。

• ショミティに参加することで女性の地位が変わる。具体的には、ショミティに入ると尊敬のまなざしで村人から見られるようになる。 • 女性スタッフ中にもショミティのメンバーだった人がいる。スタッフになった人は特に周りの人から尊敬される。 • ショミティは一度設立されると新しいメンバーが途中から入ることはない。新しいメンバーがショミティに入りたい場合は、新しいショミティそのものを設立する。 (Reflection Meeting) ● 男女のショミティ活動の目的は男女一緒である。 ● 男女が話をすることができなかったのが、今は話ができるようになったのが成果と考える。 ● ショミティ活動の目的は村の人たちが自立することである。	
特記事項	● なし
入手資料	● なし

訪問先	男性ショミティ Gono Sheba（ショミティ番号：AA1—20）
面会者（役職）	ショミティメンバー17名
面会日時	2002年3月30日 20：00～21：00
面会場所	Niz Pubail 村
訪問目的	ショミティ活動に関するインタビュー

調査結果要約：

- このショミティでは共同で牛を購入し飼育している。牛乳を販売し、その売上金はショミティに戻し、ファンドが増える形を採用している。
- 1999年にシャプラニールが村に来て積立金が始まった。これまで、道路などを建設した。
- ショミティのメンバーは17人。ショミティに入るための基準はなく、入りたい人は入れる。入らない人は、5タカ貯蓄しても、それを取られてしまうと思っているからである。
- この 2 年間でできたことは、学校と簡易衛生トイレの建設。簡易衛生トイレはショミティのメンバーの家5、6カ所で建設した。簡易衛生トイレを一基建設するには550タカを要する。個人は220タカ支払う（2002年度からは300タカ）。残りはシャプラニールが負担する。簡易衛生トイレはシャプラニールの地域開発センター（CDC）内で作成され、受益者負担分を支払った村人が自宅まで運び、設置する。簡易衛生トイレを建設するのは衛生面を考えてである。簡易衛生トイレを建設してから、家族の病気が減った。
- これからは電気が来てくれればいいと思う。道路も作りたい。
- 識字学校をして良かったことは、全員が自分の名前を書くことができるようになったことである。文字の読み書きができる人も少しいる。計算ができるようになった人もいて、会計をまかされている。
- 村ではボロ米とジュートを栽培している。村人はほとんどが小作農で、地主が別の村にいる（要確認）。1年間6,000タカの地代を払っている。村で1年中とれるものは「パン」。
- シャプラニールに対しては、もっと色々な知識を教えてほしいと思う。
- 何もしないで子どもが産まれないようにすることはできないか教えてほしい。(「ない」と返答)家族計画をしたいという希望はある。こういうことも相談する場があれば良い。
- 結婚する年齢は20歳前後。
- 女性のショミティの活動についてはよく知らないし、集会の場所も知らない。
- 他の NGO はこの村には来ていない。
- ショミティの活動拠点の小屋はシャプラニールが建設した。
- 会計簿（帳面）はショミティで管理している。

特記事項	● なし
入手資料	● なし

訪問先	Borodan Gri Pritilata 女性ショミティ（ショミティ番号：AAL−17）

面会者（役職）	女性ショミティメンバー14名
面会日時	2002年3月31日　10:30～12:30
面会場所	不明（ショミティがある村）
訪問目的	女性ショミティ活動に関するインタビュー

調査結果要約：

- このショミティは設立されて5年強くらいである。メンバーは全員で15名で、共同積立てをしているが、このショミティでは毎週2タカである（男性ショミティは5タカ）。メンバーの年齢は、最年長がおよそ65歳、最年少がおよそ20歳。全員結婚していて子供もいる。また、全員イスラム教徒である。
- 村は60戸程の集落。
- 積立金の使用方法についてはまだ決まっていない。今日の会議で決定するつもりだった。
- （ジン・ヌン・ナハルさん）ショミティに入った理由は、勉強ができ、サインができるようになるから。ショミティの何人かは文字が読み書きできるようになった。本も手紙も読めるようになった事が嬉しい
- （リーダー、ジョルナさんからの補足）会計ノートをつけることができる人もいる。何人かは子育ての仕方も CDC から習った。お金も貸し出している。
- 2タカは自分たちの牛の乳を売った売り上げや鶏の卵を販売して得たお金である。
- （B さん）牛 2 頭と鶏を CDC から借りている。2タカは負担ではない。ショミティがないと困る。なくてはならない。ショミティがあることにより勉強ができるし、牛も飼うことができる。
- （C さん）ショミティに入る前は女は家にいるべきと考えられ女性の地位が低かったが、ショミティに入ってそれが変わった。夫はショミティに入ることを反対したので、内緒で入って、牛を借りて、更に勉強をしたら、それを見て夫がとても喜んだ。今は夫もショミティに入りたいと言っている。
- （B さん）ショミティに入って夫が自分を見る目が変わった。入る時に少し反対した。山羊1頭を借りて飼育している。
- （C さん）夫に無断でショミティに入ったことがばれたら叱られるかもしれないと心配した。ショミティに入るに当たって女性どうしで相談し、入った方がいいという薦めがあって、夫から反対されたが入った。
- （D さん）女性が集まって会議することに対して男性は特に反対しない。牛乳や卵の販売で得たお金は夫にもあげたいが、子供のために使いたいし、CDC に返済する必要もある。
- （ジン・ヌン・ナハルさん）ショミティができる前にも女性達の集まりはあった。子供の教育などを話し合った。
- シャプラニールのお金で近くに学校ができて良かった。
- （B さん）ショミティはいいことをしているので、誰も文句は言わない。女性どうしのけんかを止めるようになった。
- ショミティメンバーの家族構成は夫婦と夫の両親と子供が多い。妻の両親と暮らす人もいる。兄弟は結婚すると独立（家が別になる、同一敷地内）する。
- 男の子と女の子のどちらがほしいかということはあまり関係ない。
- メンバーの子供の数は 2 人から4人くらい。
- 男女の差なしに、勉強させたい。子供には医者になってほしい。医者が少ないから。
- 男の子と女の子の育て方に違いはない。
- 子供の数が多いと全員を学校に通わせることができない。
- 男性ショミティとの情報交換はない。
- ミーティングで話したことを夫に相談する。
- 他の近所の女性ショミティと情報交換はする。
- 学歴については、ほとんどのメンバーが学校を出ていない。自分の名前は書ける。一人だけ9年間学校へ通った。後は少しだけ行った人もいる（2～3年くらい）。
- リーダー（CDC Field Organizer）は、メンバーの意見が違うときには、全員の意見を聞いて、数の多い方に決める。
- リーダーはダッカの大学を卒業、既婚で女の子二人、月に最低 2 回村に来る。

特記事項	● なし
入手資料	● なし

訪問先	「バングラデシュ国リプロダクティブ・ヘルス人材開発」プロジェクト プロジェクト方式技術協力
面会者（役職）	Dr.S.M.Jahangir (Superiutendent, MCHTI)

	山田多佳子（プロジェクトリーダー） 立山恭子　専門家（看護管理、助産婦研修担当） 石原由紀　専門家（産婦人科担当） 増山利華　専門家（母性看護担当） 鈴木ケイ（プロジェクトコーディネーター） （研修生） Rahim Khalim (45, FWV CM Trainee) Momtay Begum (45, FWV CM Trainee) U.K.Hosnejahar (35, S.S.C. FWV CM Trainee) Salima Akhter (43, S.S.C. FWV CM Trainee) Tahera Begun (38, S.S.C. FWV CM Trainee) Arzuba Akhter (38, S.S.C. FWV CM Trainee) Saleha Begun (48, S.S.C. FWV CM Trainee) Rashida Begun (34, B.A. FWV CM Trainee) Rashida Roushan (45, B.A. FWV CM Trainee) Lutfunnaher (37, S.S.C. FWV CM Trainee)
面会日時	2002年4月1日　9:00～13:00
面会場所	母子保健研修所
訪問目的	• プロジェクト概要について • 専門家へのインタビュー • FWV 研修生へのインタビュー • 入院患者へのインタビュー

調査結果要約：

母子へのリプロダクティブ・ヘルスに関わる保健医療サービスの改善を目標に、母子保健従事者（FWV: Family Welfare Visitor）に対して母子保健研修所とその関連機関において質の高い研修を提供している。具体的には母子保健研修所（MCHTI）でのスタッフトレーニング、機材供与、技術指導による臨床サービスの質の改善、人材育成、情報システムの強化による病院運営管理の改善を行っている。

専門家へのインタビュー

役割：石原専門家　医師（女性）―カウンターパートへの技術指導、病院運営アドバイス、FWV の研修指導

- この病院では専門家の性別（女性であること）は大いに関係がある。女性患者は男性の医師や看護師を望まない。この病院の地元スタッフも産婦人科はすべて女性医師である。他のスタッフもほとんど女性であるというのは良い。
- 患者が入院するか、検査するか、手術するか、など、あらゆる意思決定がすべて夫に尋ねないと決められない。無理に「あなたのことなのだからあなたが決めなければ」としてしまうと、後から、患者の家族の中で問題が生じるので、夫やその他の家族を呼んでから決めてもらうようにしている。
- 外来で胎児の性別を尋ねられることがあるが、この病院では一切、性別は教えない。妻は男の子が生まれないとつらい立場にあり、離婚されることもある。女の子だと中絶（非合法）をすることもあるようだ。
- 仕事以外だが、女性医師など知識もお金もある階層では、夫が家事を手伝ったりするのを見る。
- 子供ができないと女性はつらい立場に立たされる。

役割：立山専門家　看護師（女性）―看護管理、助産婦研修指導

- 女性が医療を受ける場合であっても、意思決定をするのは男性なので、その辺の配慮が必要。夫やおしゅうとめさんに了解してもらうことが必要。
- 病院の治療費は基本的には安い登録料だけなのだが、政府からの医薬品の供給がなく、患者個人で購入しなければならないことがある。入院する際に、必要なので購入するものを指示するが、女性が付き添っている場合

に、女性は買い物に行けないので困る。また、医薬品などを購入する際にお金を借りないといけないことがあるが、それも男性でないとできないので、手術や治療が手遅れになることもある。

- 宗教の影響（イスラム教とヒンズー教）で意識構造が複雑である。穢れの概念などはヒンズー教徒の方が強い。
- 出産の際に大勢の親戚がついてくるので、配慮が必要。特に男性が何人も病室に入るので、セキュリティに配慮し、制限している。
- 病院の男性スタッフがいやなので妊婦健診に来たくないという例もある。
- 農村では自宅分娩が多数（9 割弱）だが、都会ではコミュニティも場所もなく、自宅では出産できない。利用者の99パーセントがダッカ周辺（首都圏）で80パーセントが病院の近辺である。前回のお産にトラブルがあった人や難産のために紹介されてきた人が多い。
- 男の子が病気になったら病院に連れて行くが、女の子の場合は連れて行かないという状況がある。
- 母親や家族に母子保健の簡単な知識がないために子供を死なせてしまうことがあるので、健康教育が必要である。
- この病院は医師は十分だが、看護スタッフが少ない。

FWV (Family Welfare Visitor) インタビュー

- 研修参加者 10 名中 7 名は自宅から通い、3名は寮に入っての研修。1名は小さな子供（8 歳）がいる。研修を受けることに対して家族から反対はされていない。もしも反対されたら、納得するまで話合う。
- 研修に参加して、安全な出産のための知識、正常分娩時の会陰が裂けることの予防としての切開などいろいろな知識を得られたのが良かった。いろいろな人に会えたのも良かった。
- 地域に戻って、研修で得た知識を他の人に伝えたいが、道具などがないので、（研修で使った）道具が欲しい。
- 父親学級でどのように説明する必要があるのかということがわかり、男性に対しても説明できるようになった。
- 今後の希望として、日本に行って研修をうけたい、さらに技術を身に付けたい、陣痛誘発などの薬を使わない分娩についてもっと知りたい。
- この仕事をして良かったことは、収入を得られ、自分のためだけではなく、家族のためになっていること、さらに社会のために役に立つ仕事をしていられることである。
- 10人中7人が結婚後にこの仕事をはじめたが、それ以前に仕事をもっていなかった人たちは、収入が得られることによって夫との関係が変化したという意見があった。
- 女に生まれて得したと思うこと、損したと思うこと、という質問に対して、得した・良かったという意見は、母親になれたこと、夫や子供のために家事ができること、損なところは、男は自由にどこにでもいけるし、夜でもでかけられるが、女にはそれができないこと、という意見があった。
- もし、男に生まれていたら、という質問に対しては、勉強してスペシャリストになりたかった、という意見があった。
- 子育てについては、男女で育て方は変わりない、どちらにもよく勉強させたい、ということだった。

入院患者へのインタビュー

部屋は6人の大部屋、ベッド、ベッド間には仕切りカーテン等はなし。通常分娩の場合は産後1日で退院する。インタビューした棟は帝王切開などで入院期間は少し長い。

Aさん

- 産まれた子は女の子、ここの病院で生んだ理由は、この病院で産む人のほとんどが帝王切開などの特殊なケースが多いからである。ここの病院がよいと聞いていたので、親戚の人も良いと言っていたから、妊婦検診に来て帝王切開といわれたので、決めた。
- 自宅で産もうとは思っていなかった、病院で産みたかった。
- 彼女のお母さんは、自宅で産んだ方がいいと思っていたが、帝王切開だったので病院で産むことにした。

Bさん

- 産まれた子は第1子で男の子。
- この病院を選んだ理由は、医療者と患者との関係が良いし、健康診断の時に親切だったから。場所もきれいだったので。

- 自宅出産は怖いと思った。
- 産婦人科医が男の人だといやだ。恥ずかしい。
- この病院に対しての希望は特にない。満足している。

Cさん

- 産まれた子は第2子の女の子。
- この病院を選んだ理由はここがとても良いと聞いたから。検診に来ていて良いと思った。
- 自宅出産は正常分娩でも怖い。自分は1人目が帝王切開だったので、2人目も帝王切開で産むことになっていたので、病院に来た。
- 病院に対しての希望は、薬の供給がもっと豊富で、お金がない人でも使えるようにした方がいい。高血圧だったので、この病院での出産は無理だと言われたが、違う医者がここでも産めると言ったので、ここで産んだ。本当はダッカメディカルホスピタルに行けといわれた。この病院には妊娠中毒症の妊婦の観察室がないので、それを作ってほしい。
- 男の医者でもいいが、お産は女の先生の方がいい。男の医者だと恥ずかしい。ただし、緊急時の対応など専門的領域ならば、男性の医師でも良いと思う。
- 二人とも女の子だが、これでいい。特に男の子をほしいとは思わない。
- 本人はカレッジ（短大？）で Home Economics を勉強している。
- 母乳をあげながら答えてくれた。

病室は6人部屋。母子同室、同ベッド。1人目のインタビュー者はまだかなり痛みがあったようである。2人目、3人目は好意的、特に3人目は非常に興味を持って答えてくれた。

特記事項	• 保健・人口セクタープログラムについては、入手資料を参照。
入手資料	● 保健・人口セクタープログラム（HPSP）概要（2部） ● バングラデシュの女性の人権と健康に関する指標 ● ニュースレター（1～7号）

訪問先	「女性子ども問題省女性問題局」水野専門家　(個別専門家派遣)
面会者(役職)	水野桂子専門家(ジェンダー)
面会日時	2002年4月1日　17:30～19:00
面会場所	タンガイル県 Biroti Hotel
訪問目的	専門家の活動概要と、問題点の抽出、改善点の提案についての意見聴取

調査結果要約:

役割

1.女性問題局の政策アドバイザー

- 地方の女性問題局の業務を実地調査して問題分析して改善する役割を担っている。
- NGO やドナーのジェンダートレーニングの評価、同行調査
- バングラデシュの女性の状況に関する情報の収集(新聞・NGO 資料)

2.JICA の案件を WID/ジェンダーの視点で見て調整する。

- 現在力を注いでいるのは、養鶏プロジェクトの女性参加についての調査。
- 女性農業研修センターのカリキュラムの改善および女性農業研修に関する関係者、女性問題局・JICA・オイスカの連絡調整役

3.JOCV の WID 分野への助言

4.広報活動

インタビュー要約

- 女性局のアドバイザーという役割上、また、この国の文化的なさまざまな面で男性領域と女性領域が分離されているので、専門家の性別は仕事に影響する。女性であることから、日常生活から仕事上までさまざまな配慮が必要である。
- 各プロジェクトへのアドバイスをする際にジェンダーに配慮している点
- 性別役割を固定化することにならないようにする。たとえば、女性の刺繍や縫製の研修に対して援助している機関は多いが、刺繍や縫製だけではなく、経理やコンピューターなどの研修も必要だと考える。
- 女性が参加していないプロジェクトに女性が参加できるようにする。養鶏プロジェクトのあるサイトでは女性が参加していなかった。オフィサーは、女性は子供がいるので参加しないという意見だったが、デーケアセンターを設ければよい、というアドバイスをした。
- 夫婦の関係性、家庭内暴力について、養鶏などの直接的には関係のないプロジェクトにおいても話題にして、女性の地位向上に役立つように配慮している。
- ジェンダーへの理解を高めるための教材を自分で作成している。
- 社会・文化的(特に宗教的)状況から、女性が外にでて働くのが難しいが、縫製工場の労働者など、収入を得るという理由があれば外に出て働いている。このような動機があれば、社会・文化的状況が変化する契機になる。
- 仕事をする上での障害は、語学力、また、ジェンダー関連での人員の少なさ。政権交代によるカウンターパートの交代が業務の遂行を難しくしている。大きなイシューを扱っているのに担当官が少ない。
- 生活レベルで日常会話の中でもジェンダー教育を進めている。
- 女性の意思決定を促すには、やはり経済的な自立をし、認められる必要がある。女性が首相や党首になっても、大物の娘や妻であったりするので、本当の意味でのリーダーが出るように支援する方向で協力する必要がある。そのためにはどうやってリーダーになったのか調査をし、フィードバックする必要がある。
- 男性の協力や理解を得るために、なるべくコミュニケーションをよくして、挨拶などをすること、無駄話などから突破口を開く。必ず大切な日にはプレゼントなどをする。そのようにして自分を認めてもらうことからはじめなければならない。

● 技術移転先については、女性と男性の両方にした方がよい。その場合、ケースバイケースだが、教える内容が違った方がいい時もある。内容によっては男性向け女性向けにした方がよい。女性向けには assertive training などを使うのがよいと思う。 ● 受益者が女性か男性かによっても教える技術は変わらないケースがある（家庭菜園や牛の飼育など）。家庭向けのマニュアルを作れば使うことは可能だと考える。小規模なものであれば、男女の別無しの方がよい。Role Model を使って見せていけば女性でできないものはないと考える。男性も刺繍や編み物をしても良いが、知らない間に刺繍と編み物は女性の仕事になっている。 ● 仕事はまあまあ順調に進んでいる。担当所員のサポートが大きい。Private Consultant の支えも大きい。今の JICA 事務所は仕事がしやすい環境が整っているし、WID に対して理解もある。 ● 研修等のいろいろな機会を逃さず、ジェンダーの意識を高めていくことが長期的には効果が出てくる。今後、男性向けの研修にもジェンダーの視点を入れたい。 ● 自分がこれまで学んできたことを活かすことができて嬉しい。イスラム教について十分理解しているわけではないが、いまのところは、この宗教の下で生きていくことがいかに女性にとって大変なことかと思う。宗教に対する困惑がある。 ● 「バ」国は、汚職、仕事に対する対応が遅い、などによって仕事がしにくい。政府と仕事をしていくことでの見通しは暗いが、良い NGO との連携に希望がもてる。	
特記事項	
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト （専門家チーム派遣）
面会者（役職）	矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家
面会日時	2002年4月2日　9:00～9:30
面会場所	PRDP プロジェクト事務所
訪問目的	
調査結果要約：	
● 矢嶋専門家、藤原専門家による調査スケジュールのブリーフィング ● 訪問先の確認（Kalihati　Upazila 事務所（郡庁）、Narandia Union ユニオン評議会、Tarabari 村女性会議、 ● Baniafair 村女性会議メンバー、Dakshin. Chamuria 村男性会議 ● PRDP 内のフィールド・オーガナイザーの会議の傍聴	
特記事項	
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト （専門家チーム派遣）
面会者（役職）	（調査同行スタッフ） 矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家 Md. Akkel Ali（Upazila Deputy Project Coordinator, Union Development Officer, Male, 40） Md. Rais Uddin (Union Development Officer, Male, 35) Md. Anisur Rahman（PRDP Staff, Male, 35） Ms. Anowara（WID Coordinator, Female, 40） （インタビュー対象者） Mr. ??（Upazila Project Coordinator）
面会日時	2002年4月2日　9：30～10：30
面会場所	Kalihati 村　Upazila（郡庁）
訪問目的	インタビュー

調査結果要約：

- BRDB はプロジェクトで形成したカリハティ郡内の連携組織 TCCA（非政府連合組織）を支援している。
- 自分達の問題は自分たちで解決するという方針である。
- 現在、郡事務所職員は 39 名いて、政府から給料をもらっている。
- BRDB 部門では女性を対象にしたプロジェクトについて郡事務所本部に 1 名の職員、プロジェクトに 4 名の女性担当職員がいる。
- 現在、女性を対象にしたプロジェクト（モヒラグラミン・プロジェクト）は郡内 312 村のうち 60 村で実施している（これは本プロジェクトとは別のもの）。
- この女性のプロジェクトは経済活性化のために 1985 年より組織化した。
- 1グループは 20 人から 40 人で構成されており、メンバーは 18 歳以上の女性
- 毎週5タカずつの積み立てと識字教育を実施している。グループの団長・副団長は女性、オーガナイザーも女性だが、会計は男性である。
- これとは別に、安田専門家からの資料等によれば、本プロジェクトである PRDP の活動はこの郡内の2つの UNION の中の 14 のビレッジ女性コミティを拠点にすすめている。

特記事項	なし
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト　(専門家チーム派遣)
面会者(役職)	(調査同行スタッフ) 矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家 Md. Akkel Ali (Upazila Deputy Project Coordinator, Union Development Officer, Male, 40) Md. Rais Uddin (Union Development Officer, Male, 35) Md. Anisur Rahman (PRDP Staff, Male, 35) Ms. Anowara (WID Coordinator, Female, 40) (インタビュー対象者) Mr. Mohammad Ali (ユニオン評議会議員、Male, 35) Md. Shahazahan Ali (ユニオン評議会議員、Male, 45) Ms. Lovly Sultana (ユニオン評議会議員、Female, 38) Mr. S.M. Shamsul Alam (ユニオン評議会秘書、Male, 52)
面会日時	2002年4月2日　10:30～11:30
面会場所	Narandia 村　ユニオン評議会
訪問目的	インタビュー

調査結果要約:

- ナランディア Narandia ユニオンは 43 村から構成されている。
- ユニオンにはユニオンポリショッド(評議会)があり、選挙で選ばれた議員(評議員)がいて、独自の予算編成権をもっている。
- ユニオン評議会の構成は以下のとおり。
  ナランディア・ユニオンは 9 つのワード(選挙区)からなり、各ワードは平均 4～5 の村から構成されている。各選挙区には 1 名のみの議員枠が割り当てられている。そのほか 3 ワード毎に 1 名の女性議員枠がある。その結果、合計で 9 名の選挙区選出評議員(男女とも可　各ワード 1 名)と 3 名の女性評議員(3 ワード毎に 1 名)で合計 12 名の評議員がいる。今後は予定として 2002 年 12 月に選挙がある。評議員の任期は 5 年で議員歳費は月額 700 タカ(以前は 300 タカ)である。評議会は貧困者(例えば夫をなくした女性)に米や小麦の食糧支援をしたり、有力 NGO である BRAC に貯金をしている。
- この地域の教育水準はまだ十分ではなく、SSC(中等教育レベル)に達しているのは男女とも 50%程度である。
- インタビューした女性評議員は以前は BRAC の指導者だった。彼女は現在はユニオン評議会の開発予算委員長をしている。年間開発予算はウプジラ(郡)から 12 のユニオンに均等割り振り後、ユニオン内の村でローテーションできまる。今年度はユニオンで 40 万タカ予算がある。道路のための 6 つのプロジェクト、通信手段の整備、インフラの整備等に使用している。ユニオン評議会内事業実施委員会が設けられており、そのうち女性が委員長をしているのは 3 委員会である。ユニオンでは PRDP が UCCM(ユニオン連絡調整会議)を毎月開催している。
- 事務所に隣接して、ユニオン・デヴェロプメント・センター棟がこの PRDP のプロジェクトの一環で完成している。この事務所棟は 2001 年 9 月に完成(全体は 5～6 ヶ月で完成、会議室は 7 ヶ月で完成)した。コンクリート 2 階建で、2 階では UCCM が開催されており、1 階を地元 NGO の SSS に貸す予定(賃料 1,800 タカ／1 ヶ月)。藤原専門家の話では、今後、この施設を拠点にして各種の会議を開くなど、住民の活動を活性化させていきたいとのことであった。
- 矢嶋リーダーによれば、村人が情報を得ることが重要という考えから、プロジェクトで掲示板を作って、そこにのせる情報の発信と、掲示板の維持・管理をしている。情報の重要さの一例として、米の援助がされたときに、その配布先はユニオン・ポリショッドが決めるが、どこの家にどれだけ配布したかは公にはならなかったが、それがわかると、その配布が適切かどうかについて意見を出すようになる。それが重要である。

Ms. Anowara (WID Coordinator, Female, 40？)

- 役割:女性のプロジェクトに参加して、女性の開発を担当している。具体的には、教育(識字)・衛生管理・農業・魚養殖・畜産(牛・鶏)の技術を教えている。それらの知識は CARE で習った。結婚してすぐのころに研修を受けた。この仕事を選んだのは、国のため、周囲のため、村のため、自分のためになると思ったから。以前は女性は

外に出られなかったが、今はでられるようになった。それでも、女性が参加しづらい原因としては、村では子供が多く、家事が大変だということ。女性のショミティをつくり女性が参加しやすくしたい。ミシンでハンディクラフトを作り、それを売って収入を得られるようにしたい。それらの活動に対して男性の理解が必要なので、女性たちに夫と話し合うことを勧める。	
特記事項	• 安田専門家が帰国中だったためにインタビューできなかったのが残念だった。 • 掲示板の設置は重要だが、女性の非識字率が男性よりも高いなら、情報が男性にのみ有利にならないような配慮がされていると良いと感じた。
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト （専門家チーム派遣）
面会者（役職）	（調査同行スタッフ） 矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家 Md. Akkel Ali（Upazila Deputy Project Coordinator, Union Development Officer, Male, 40） Md. Rais Uddin (Union Development Officer, Male, 35) Md. Anisur Rahman（PRDP Staff, Male, 35） Ms. Anowara（WID Coordinator, Female, 40） （インタビュー対象者） Tarabari 村女性会議メンバー
面会日時	2002年4月2日　11：30～12：30
面会場所	Tarabari 村
訪問目的	インタビュー

調査結果要約：

女性グループ員個別インタビュー（吉野・宮原担当分3名）
事前に作成した質問紙に基づく面接調査

(1) Ms.Morzina Akhter　24 歳（面接時間：午前 11 時 40 分～11 時 55 分）

★家族構成・教育歴・職歴
7 年前に夫と結婚した。子どもはない。教育歴は SSC。家でミシンの仕事をして製造販売する。
子どもはほしいが、性別はどちらでもいい。

★グループ（プロジェクトによる村の女性グループ）に加入するに際して
2 ヶ月前にこのグループにオーガナイザーの勧めで入った。夫は加入に反対しなかった。むしろ薦めた。村の成長のために賛成した。この女性グループに加入する前から村のコミュニティに加入していた（学歴が高いから）。17 人のメンバーのうち女性は 2 人だけ。これには今でも加入している。

★グループに参加して
現在のグループ活動は楽しい。男ばかりのところには行きづらい。女性グループの会員は 12 名。
月 1 回毎月 3 日の午前 11 時から 12 時 30 分にミーティング。トイレの衛生管理などについて話す。雨の日は部屋に中で会合（晴れの日も部屋で）。家族にもミーティングの内容をはなす。

★期待すること
自分のトイレがほしかった。衛生のことと周りから見られないようにしたい。トイレはまだ完成していない。目標はトイレの建設。早くトイレがほしい。まわりをきれいにしたい。

★違う性別にうまれたら・・
男にうまれたら、一緒にいい道路を作りたい。

(2) Ms.Mosammat Sahera　50 歳すぎ（本人も不明）（面接時間：午前 11 時 55 分～12 時 10 分）

★家族構成・教育歴・職歴
家族は夫、子ども 8 人（誕生順に男・女・男・女・女・女・男・男）。娘 5 人（うち 4 人結婚）、息子 3 人。長男はダッカの大学（進学か勤務か不明）、2 番目の息子はダッカで運転手、3 番目は中学 3 年。
末の息子、娘、長男配偶者と一緒に生活。
教育歴はなし（学校にいっていない。成人学級にいっただけ）現在目がよわい。
仕事は農業に従事している。ミシンはしていない。家事は全部自分が担当している。

★グループ（プロジェクトによる村の女性グループ）に加入するに際して
このグループにはまわりのひとの勧めで入った。みんな入りたがっている。夫は加入に反対しなかった。

★グループに参加して
現在のグループ活動は楽しい。女性グループの会員は 12 名。期待することはトイレの建設。
トイレを作るのを一緒に手伝った。これまで家できつい仕事をしていた。グループ員とおしゃべりするだけでも楽しい。村が開発されていく（発展する）ことをきくと楽しい。村の開発に関する情報がつたわってきた。

★期待すること

これからはトイレ、道路をつくってもらいたい。掲示板の農業ニュースを改良する（字を大きくするなど、みやすくしてほしいということかどうかは不明）。自分のやりたいことは「思い浮かばない」
★違う性別にうまれたら‥
男だったら大きいことをやりたい（女の人は小さいことをやっている）

(3) Ms.Mazeda Parvin　21 歳（面接時間：12 時 10 分～12 時 30 分）
★家族構成・教育歴・職歴
家族は自分、夫、子ども 1 人（男、4 歳）。年とった夫の父母と住んでいる。
教育歴は SSC レベル（試験はうけていない）
結婚したのは学生のとき、16 歳だった。
★グループ（プロジェクトによる村の女性グループ）に加入するに際して
2 ヶ月前にみんなと同じときに入った。みんなの話をきいて自分からはいろうとした。夫は加入に反対しなかった。
夫は村の委員会の会長（選挙ではなく推薦）。夫は 29 歳くらい
★グループに参加して
この女性グループでなんでもやってみたいがまだやっていない。現在のグループ活動ではトイレづくりをすこし手伝った。夫はカレッジ（ヌフリア・ハイスクール）の先生。自分は家事育児しかやっていない。
自分の土地で農業をほかの人にやってもらっている。これまで女性どうし2～3 人で話をすることはあった。
現在、大勢で話をしている。このグループのなかでは緊張しない。出席者は必ずしゃべる。
最初はちょっと緊張する。みんなが自分の話をきいてくれるのはうれしい。
★期待すること
今後は技術的トレーニングをうけたい。ミシン、ハンディクラフト製品をバザールで売る。
これからの自分の目標はミシン、ハンディクラフト、ほかにもいろいろなことをやりたい。
自分の目標は、子どもの教育、牛を飼う、鶏を飼うこと。
収入がはいれば、自分のためにもいいし、家族全体も豊かになる。自分で稼ぐことができれば自分でかせぎたい。
夫は夫で、自分は自分だと思う。子どもには勉強したいところまで進学させたい。
自分にはチャンスにつながる情報がない。現在の若い人はいい。だから自分で稼ぎたい。
家計は夫が払えばいいといっているし、協力して教育費を負担してくれる。自分でできるところはできれば自分でやりたい。足りない部分は夫が払う。子どもは母親のほうがかわいがっている。
★違う性別にうまれたら‥
男だったら、できるかぎり勉強していい仕事につきたい。

- 女性ミーティング参加者グループインタビュー（柘植担当分）（名前；ラベア、シュルタナ、ロケア、コモラ、アシュナ、モイジャン、ミネ）

（女性ミーティングの参加者1 2名中7名が参加、年齢はもっとも若い人が 25 歳から年長者が 50 歳くらい。年長者は自分では年齢はわからないとのことだった。男性の前だったためか、年長の2人(F,G)は顔をスカーフで隠すようにしていた。）途中で 1 人が加わったために、記録した名前がずれたかもしれないので、発言者は記号で記す。

A：SSC 合格、HSC の勉強をしたが合格はしていない。19 歳。息子 1 人娘 1 人。

B：教育歴なし、結婚年齢 15 歳か 16 歳、息子2人娘2人。

C：小学校に少し通った。名前は書ける。結婚年齢 12 歳か 13 歳くらい。息子 1 人娘 1 人。

D：SSC の勉強をしたが不合格だった。結婚年齢 15 歳か 16 歳、息子2人娘3人。

E（年長）：教育歴なし、結婚年齢　子どものころとしか憶えていない。息子4人娘6人、

F：クラス5、結婚年齢 12 歳か 14 歳くらい。娘1人。

G（年長）：教育歴なし、結婚年齢 10 歳から 12 歳くらい。息子2人

なぜ、女性ミーティングをつくったのか。何をしているのか。

女性ミーティングはできて2ヶ月たった。農村の発展のために必要。毎月 3 日に午前 10 時から 11 時に集まる。1）保健衛生（トイレ）について話しあう、2）みんなで裁縫仕事をする。売れるなら売りたいが、今のところ売らずに自分たちの家で使っている。集まることについて男性が反対したり文句をいったりはしない。

今日はどんな話合いをしているのか

衛生トイレがあると健康のためにどう良いかという話合い。（設置実施はプロジェクトの助言を待ってするということだった。）

女性ミーティングに期待するもの。

衛生トイレの設置、水ポンプ、ミシンによる収入。道はできた。

女性ミーティングがなかったときに、女性が集まって話し合うことはあったか？

このような会議はなかった。Cさん　いろいろな問題について世間話程度ならした。

女性ミーティングができたことについての意見。

Cさん　とてもいい。

トイレをどこにつくるかを決めるのは男性か女性か？

Bさん　男も女も一緒に決める。？さん　女が決める。？さん　女性が何かしようとすると男性に相談して決める。男性が決めるときには女性には相談しない。

女性ミーティングで決めたことについて男性が反対することはないか？　もし、反対されたらどうするか。

？さん　女性が決めたことが良い決定なら、反対はしない。Cさん　男性に理解させて決めさせる。Dさん　両方で相談して決める。

男性の許可なくできた方が良いと思うか？

Cさん　女性たちが男に説明したら理解してもらえるし、援助もしてもらえるので、そうは思わない。

女性ミーティングができてあなたは何か変化しましたか？

Aさん　2ヶ月やってきて、人前で話すのがこわくなくなった。みんなそうだと思う。(相槌あり)

Cさん　男の人と話せるようになった。

女性ミーティングに参加してから夫など男性との関係は変化しましたか？

A さん C さん　夫と衛生トイレのことなどの話をするようになった。ただ、以前にビレッジコミッティがやった道をつくることについて話したことはある。

プロジェクトに期待すること

トイレを早く作って欲しい。(複数)　A さん　養鶏をしたい。

女に生まれて良かったか？

E さん　C さん　Fさん　それはアッラーが決めることなので、良くも悪くもない。

A さん　男は収入があるので、男に生まれた方がよかった。

女に生まれて良かったことは？

？さん　家族がいること。子どもがいること。(他の人も同じだという)

これからやりたいこと。

C さん　家族のめんどうを見て、子どもをちゃんと育てて健康に配慮する。村の女性のリーダーになる(と言って笑った)。

A さん　子どもたちに教育を与えたい。最低限 SSC までの 10 年かもっと。

子どもが教育を受けるとどんないいことがあるのか？

C さん　勉強して文字を読めるようになると、良い結婚をしたり、就職したりできる。

男の子と女の子の育て方で違うところはどこですか？

F さん　ない。A さん　男も女も同じ。教育も同じようにする。

もし、男だったらなにをしたいか？

C さん　勉強して就職して働いていたと思う。

D さん　もっと大きくなりたい(意味不明)。男ならやりたいことはいろいろある。

日本では夫が稼いだお金をすべて妻に渡して、妻が夫にこづかいを渡すが、みなさんは？

その家によっていろいろ違う(と口々に話している)。

C さん　うちは日本と同じように夫がわたしに稼いだお金を渡す(他の人たちは「へぇー」という感じ)

？さん　必要なときに必要な分を夫からもらう。

夫に内緒で何か買うことはない？　おこずかいをためておいて何か買ったりしない？

ない。(複数)　G さん　ある。　？さん　鶏を買った。家のためにやっていることなので。

C さん　家族みんなのために使うので、夫に相談せずに買っても文句をいわれることはない。

特記事項	なし
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト （専門家チーム派遣）
面会者（役職）	（調査同行スタッフ） 矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家 Md. Akkel Ali（Upazila Deputy Project Coordinator, Union Development Officer, Male, 40） Md. Rais Uddin (Union Development Officer, Male, 35) Md. Anisur Rahman（PRDP Staff, Male, 35） Ms. Anowara（WID Coordinator, Female, 40） Baniafair 村女性会議メンバー
面会日時	2002年4月2日　14:00～14:30
面会場所	Baniafair 村
訪問目的	初の女性会議視察

調査結果要約：

- はじめての女性会議を参与観察した。リーダーとファシリテーターが並び、それに90度になるように、むしろの上に1列に 14 人とそのうしろに若い女の子たちが大勢すわっている。男性は男性だけでかたまって、見ている。
- CDC(Community Development Center)の女性オーガナイザー（ビレッジ・コミッティの女性委員じゃなかったでしょうか？）が女性会議設立にむけて、これまで CDC がおこなってきた活動や、住民がしたいこと、してほしいことなどについて大変熱心にリードしていた。Ms. Anowara（WID Coordinator）がファシリテーターとしてサポートしていた。しかし、住民自身のほうからの反応はあまり活発とはいえず、グループの設立は簡単にはいかないようだ。
- リーダーが裁縫（ミシン）が良いのではというのに対して、誰も意見をださない。ファシリテーターがリーダーだけの意見か、みんなの意見か、と確認しているが、しーんとしている。見ていた男性のファシリテーターが、男性は道が必要という話をしているけど、あなたたちは女性として何が必要だと思うか、と尋ねたが返事はない。ファシリテーターがリーダーに、女性たちに女性会議のことをちゃんと知らせてますか、と確認。リーダーは知らせているよね、という感じで他の女性たちに確認。リーダーはミシンの他にも植樹や養鶏があると説明している。（私たちが見ているのがいけないのかもしれない）
- 会議の観察は開始から10分くらいで、次の訪問地である Dakshin. Chamuria 村に移動しなければならなく、会議のその後がどのようになったのかは不明である。

特記事項	
入手資料	なし

訪問先	住民参加型農村開発行政支援プロジェクト （専門家チーム派遣）
面会者（役職）	（調査同行スタッフ） 矢嶋吉司　専門家 藤原洋二郎　専門家 Md. Akkel Ali（Upazila Deputy Project Coordinator, Union Development Officer, Male, 40） Md. Rais Uddin (Union Development Officer, Male, 35) Md. Anisur Rahman（PRDP Staff, Male, 35） Ms. Anowara（WID Coordinator, Female, 40） （インタビュー対象者） Dakshin. Chamuria 村落委員会男性幹部
面会日時	2002年4月2日　14：30～15：00
面会場所	Dakshin. Chamuria 村
訪問目的	インタビュー

調査結果要約：

- Dakshin. Chamuria 村はサリーの縫製が有名な村であり、バザール立地する村である。
- この村はＰＲＤＰの前身の2つの先行するプロジェクトサイトとなっている。
- 10 年以上コミュニティ（ビレッジコミッティ？）がつづいている地域である。今日は道づくりの開始式がある。ここには郵便局もある。
- 14 年前にビレッジコミュニティができており、村内に図書室がある。このユニオンの中にある6つの図書室のうち1つがここにある。図書館には女学生も来る。
- 藤原専門家の話として、女性に焦点をあてるには女性の専門家がこないとやりにくい。ここではモティベーション・プログラム（経済的なインセンティブを与えるプログラム）はいれない。

- 2時 50 分から村内の小売店前のミーティングプレイスで即席インタビュー開始
- ビレッジコミティメンバーである Mr. Dhakin および同副会長のマイノ・ディンティラさん（60）と意見交換した。その後、会長（氏名不明）も顔をみせた。メンバーたちは「女性にいいことは村にもいいこと。ビレッジコミッティは以前に男性たちが始めたが、現在は女性もはいっており 24 人中 5 人が女性である。
- ユニオンポリショド議員（氏名不明、年齢 60 歳）
- 女性がビレッジコミッティの委員になっていることについての意見は？
- 良い。法律で定められた権利なので、女性の委員がいないといけない。ここでは、20 年（10 年？）前から女性議員が（選挙ではなく）指名で委員になっていた。
- 女の役割と男の役割は違うか？　家ではどうか？
- ビレッジコミッティの委員としては同じ。家では、男と女と話しあいをして一緒にやるべきだ。女は家にいて家事をするのが役割。子育ても女親の役割。むかしは男の子を好んだが、今ではそうでもない。

特記事項	
入手資料	なし

訪問先	UBINIG（Policy Research for Development Alternative）
面会者（役職）	Ms. Farida Akhter（Executive Director）

面会日時	2002年4月3日　18:10～19:30
面会場所	UBINIG 事務所
訪問目的	バングラデシュの女性の置かれている状況について UBINIG の取組みについて

調査結果要約:

- 家族計画について

  女性が家族計画を望んでいるのは理解しているが、人口抑制政策の下で行われている家族計画は、お金などを渡して女性が避妊をするように誘導しており、副作用についても配慮が足りず、本当の選択ではない。本当の選択とは、女性が子供をいつ、何人もちたいかを決めることができ、避妊をするか否か、避妊方法はどれを使うか、いつやめるか、などを選択できることである。避妊方法の選択肢が注射法やノルプラント（皮下埋め込み式避妊具）のように、女性が自分で開始したり止めたりできず、副作用もある方法に誘導されているのは問題である。

- 女性と暴力

  ダウリー（女性側から男性側に支払われる婚資）に関係する暴力の問題が大きい。ダウリーは法律で禁じられているが、物品から現金（相場は 20,000 タカ）に移ってきたため、問題が深刻化している。ダウリーを十分に支払えないことを理由に夫が妻に暴力をふるったり、一度に支払えなければ結婚後も妻の実家に支払いを要求したり、離婚して別の女性と結婚することが頻繁に生じている。結婚前の女性はダウリーを貯めるために縫製工場で働いている。ダウリー廃止への啓蒙活動が必要。

  UBINIG では Trafficking women に関する調査を問題解決の試みをしている。

- 開発におけるジェンダー主流化の取り組みについて

  政府が実施している女性への研修機会の多くは結婚した女性向けのものであり、未婚で 20 歳前後の女性への研修や就業機会が限られており、多くは NGO で研修を受けたり働いている。政府が未婚の女性に対しても配慮すべきである。

  また、女性が外に出て働けないからといって女性に裁縫の研修をすることが多いが、ミシンを高いお金を支払って購入しても、それが女性の収入獲得や地位向上に結びつくことはあまりない。女性が宗教的･文化的に外に出られないと決め付けずに、地域的違いも見て（たとえば南部では確かに女性はあまり家の外にでないが、北部では外にでている）、また実際に女性が外で働いていることも見て、女性のためにどんな研修が必要かをよく考えるべきである。ミシンよりも農業の研修の方が必要である。

- 農業研修について

  女性にとって農業の技術研修は重要である。貧困の問題にも食料が確保できるし、栄養などの健康にもつなげることができる。

  先進国が農業の技術移転をする際に、化学肥料や農薬を用いるが、それは危険であり、地力も衰えさせ、環境を破壊するので良くない。有機肥料にすべきである。また、先進国は種苗を買う技術を教えているが、貧しい人々には種を買うお金がなく、さらに、女性は種を購入しに出かけることも難しい。それだけではなく、外国資本を儲けさせる技術移転であり、また生物の多様性を破壊する。ジェンダーに配慮するなら、女性たちが自分たちで栽培し収穫するときに種を得て、それを互いに交換することを教えるべきである。

  農業の機械化についても、機械が外国資本のものであり、機械を買うために借金する必要があり、さらに機械化された農業には女性が参入できない。機械に支配される農業ではだめである。

  土地所有は圧倒的に男性だが、父親から土地を相続して所有している女性もいる。

  UBINIG ではタンガイル県において、有機無農薬の有畜農業、種を自分たちで得て、生物多様性を保持する、男女が共同で働く農場を運営している。そこでは、穀類･野菜･香辛料･果物の栽培と鶏･あひる･牛･ヤギなどの飼育をしている。

特記事項	
入手資料	• Initiatives of Farming Communities for a Happy Life • SANFEC(South Asia Network on Food, Ecology & Culture) NEWSLETTER

訪問先	「リプロダクティブ・ヘルス地域展開プロジェクト（CORHP） （開発パートナー事業：ジョイセフ）
面会者（役職）	Mr. Ismail H. Bhuiyan（Project Director, CORHP） （調査同行者） 「第2次人口と開発研究会」現地調査団一行 Ms. Fiona Mirza（Assistant Director, JICA Bangladesh Office） Mr. Ali（JICA Bangladesh Office）
面会日時	2002年4月3日　9：30～10：30 2002年4月3日　12：00～12：30
面会場所	CORHP プロジェクト事務所
訪問目的	プロジェクト概要説明について 施設見学 識字教育見学

調査結果要約：

- 同プロジェクトは開発パートナー事業として 2001 年3月に開始した。
- プロジェクト実施期間は3年である。
- プロジェクトの目標は、プロジェクト対象地域の女性のリプロダクティブ・ヘルスの向上である。
- 具体的な活動として、「バ」政府の ESP（Essential Service Package）と mobile clinic、識字教育、公衆衛生、スキルトレーニング（ミシンや刺繍など）、とマイクロクレジットを行っている。最終的には、RH/FP がコミュニティベースで実施され、女性が自分たちの健康についてよりよい選択をできるための知識とスキルを身につけ、FPAB や他の関連機関がプログラムの持続可能性について強化されることを目標としている。
- スタッフはほとんどが女性で、スーパーバイザーと呼ばれている人が 3 人、FDV（Family Development Volunteer）が15名いる。FDV は対象村落から代表者を選んでいるので、全てが地域住民である。
- FDV は月に一回、各村落にある Sub-center で会議を開いている。
- 思春期教育は男女別に実施されており、男女の体や生殖機能の違い等を教えている。
- 男性に対する家族計画や保健などの情報提供の機会が少ない。

特記事項	なし。
入手資料	Community Operated Reproductive Health Project (CORHP)　Introduction & Achievement

訪問先	「リプロダクティブ・ヘルス地域展開プロジェクト（CORHP） （開発パートナー事業：ジョイセフ）
面会者（役職）	Mrs.Shahida Islam: CORHP の Supervisor（FDV を統括する 3 人のうちの1人） Family Development Volunteer(FDV)数名
面会日時	2002年4月3日10：10－10：30
面会場所	CORHP プロジェクト事務所

調査結果要約：

プロジェクト事務所におけるスーパーバイザーの女性と FDV へのインタビューを行った。
聞き取り結果は以下の通り。

Mrs.Shahida Islam　Supervisor, CORHP
28 歳。College 卒業（B.A.）既婚。娘（1歳半）

- この職（Supervisor, CORHP）に就いたのは結婚前からで、College を出て初めての就職だった。多くの人と会って話す機会を得られる職であり、特別なトレーニングを受けられるというのが良いと思った。実際にこの職に就いて人々から敬われる(respect)ようになった。
- 職に就くに際して両親は理解があった。父親は娘が所得を得ることを喜んでいた。結婚後も夫も夫の母も理解があり、協力的である。彼女が仕事に出ているときには夫の母が子供の世話をしていてくれる。所得があることで夫からも尊重されていると感じる。
- このプロジェクトに期待するのは、この村には女性の医師がいないので、男性医師だと女性たちは、恥ずかしがったり、保守的だったりするために、診察を受けたがらないことがあるので、女性の医師が着任してくれることである。また、プロジェクトに期限がついているが、ずっと続いて欲しい。
- 女性が外に出て働くことによって、夫からも村人からも尊重されるようになるので、女性がもっと外で働くようになること、働く場が増えることが良いと考える。
- 今後、個人的にやりたいのは、コンピューターを学んだり、できれば修士号をとることである。仕事も Administrator になりたい。

FDV 数名(全員で15名)

- FDV の教育レベルは基本的には SSC 取得（Class10 を終えてから全国の統一試験に合格する）Class8-14 である。FDV はその村から各1名を選んでいる。
- FDV になったのは、多くの人と会って話ができるから。村の中では家の仕事しかすることがないので、多くの女性が外に出て人に会いたいと思っている。また、研修を受けて得た知識や情報を村の人の役に立つことができ、それによって尊敬されるから。
- 家の外での仕事を持ってから、外出時にはお姑さんが子供の世話を見てくれるようになった。

特記事項	JOCV（保健婦）が1名配属されているが、会えなかったのが残念だった。
入手資料	• Dr. Shahira Sattar(Project coodinator, CORHP)”Community Operated Reproductive Health Project Introduction & Achievement,” 2001 • JOICEPNEWS No.324, June 2001 & August 2001

訪問先	「リプロダクティブ・ヘルス地域展開プロジェクト社会開発（CORHP）」（開発パートナー事業：ジョイセフ）
面会者（役職）	Charpara 村 Sub-Center にての説明 調査同行者： 「第2次人口と開発研究会」現地調査団一行 Mr. Ali（JICA Bangladesh Office） Charpar 村女性8名 ①既婚、35～36 歳、子供1人（男の子、結婚7年目に出産） ②既婚、45 歳、子供無し（離婚） ③既婚、35～36 歳、子供4人（男の子2人、女の子2人）、現在ピル使用 ④未婚、18 歳、短大生 ⑤既婚、35 歳、子供5人（男の子3人、女の子2人） ⑥既婚、25 歳、子供2人（男の子1人、女の子1人）、現在ピル使用 ⑦既婚、25 歳、子供3人（男の子1人、女の子2人）、現在注射法使用 ⑧既婚、35 歳、子供4人（男の子2人、女の子2人） 調査に同席した CORHP の FDV とそのスーパーバイザー各1名 Ms. Fiona Mirza（Assistant Director, JICA Bangladesh Office）通訳
面会日時	2002年4月3日　11：00～12：00
面会場所	Charpara 村
訪問目的	• Sub-Center 見学 • 村人（女性）裨益者インタビュー

調査結果要約：

1. Sub-Center 見学

- 屋内でのミーティング（人口と開発調査団と合同）
- Sub-Center 室内で、村人（女性）裨益者インタビュー、吉野団長担当
- FDV1名
- Charpara 村女性 22 名

FDV ヤマミンさんがリード。

- 女性 22 名が参加、村の人口 1,974 人、世帯数 380 世帯。221 人が家族計画を実行している。
- 女性グループには 92 人が参加、このうち 80 人はマイクロクレジットを利用している。
- 42 人は残額がまだ残っている、39 人は借り入れ中。
- 2002 年 3 月現在で 17,066 タカの積立金がある（このうち 3,060 タカが出資金）
- また識字教室も開催しており、17 人が学んでいる。
- 縫製には 45 人の若い女性が取り組んでいる。また 6 人はトレーニングを受けている。
- 個人個人の積み立て出納簿がある。積み立ては月に 20 もしくは 30 タカ。
- 養鶏を始める、バナナを栽培する、山羊を飼う、野菜、ジャガイモを栽培する。
- ある女性会員の夫がバナナビジネスを始めるために 1,500 タカ借りた、このうち 1,000 タカを返済した。
- 農産物の販売収入は 1,000～1,500 タカ／月
- この村の収入は平均して 500～700 タカ

調査団から質問：収入は女性が借りて男性が遣ってしまうのではないか

- 家族のために家族全員で遣う、女性個人のために遣うのではない。子供の教育にも遣う。例えば子供の教育費としては、8年生で月 30 タカかかる。個人レッスンを受けると、月 200 タカかかる。女性が自分でサリーを買うこともある。養鶏ビジネスも始まっている。ローカルバザールに売りに行く。バザールには夫か息子が売りに行く。
- ある女性は、このプロジェクトでミシンを購入した。ミシンは 2,000～2,600 タカで購入した。研修を受けて、サロワカミューズ（1枚 50～80 タカ）を縫製したりしている。この村では男性のローンはないので、女性のローンを使って

生計を立てている。

訪問団からの質問：子供の数はどれくらいか

- 子供は平均で 3～4 人
- 20 人中（未婚 6 名、子供 1 人＝1名、2人＝2名、3人＝3名、4人＝4名、5人＝3名、6人＝1名）
- 子供が多いと恥ずかしいという感覚が女性に出てきた。
- 「女性は外に出られない、教育は男性だけが必要」という迷信が薄れてきた。
- ある女性メンバーの夫の父も「女性も仕事をして金を稼ぐべきだ」となっている。
- 次第に女性の結婚年齢が上昇してきて、17～18 歳以前には結婚しなくなった。
- 早婚は女性の身体に悪いという認識が出てきた。
- 家庭の中ではまだまだ、男の子どもが優先されているのが現実。
- この村は比較的豊かなので、グラミンバンクはできていないとのこと。

サブセンターを無償提供している男性（60 歳、元小学校先生、2 年前に退職）が入室。子供は4人（男2，女2）

女性の避妊について

- ピル使用5人、インジェクション3人、手術1人、男性のコンドーム1人、避妊は夫も同意している。

2．屋外でミーティング

村人（女性）裨益者インタビュー

- 現在この村への医師の巡回は月1回ある。Sub-Center ができる前は、町までででないと医療を受けられなかったが、現在は楽である。
- FDV が村に来るようになってから、衛生、生理、妊娠についての知識が増えた。色々な避妊方法や家族計画の知識がアップした。
- インタビューした村人のほとんどが避妊をしている。主なものはピルと注射法である。
- ⑦が注射法を選んだ理由は、ピル投薬による副作用があり、医師に相談して注射に変えた。
- ⑤は最初ピルを使ったが頭痛の副作用があり、7年間注射法をしていたが、医師が2カ月村に来ないことがあったので、政府のクリニックまで出向いて注射を打った。そうしたら、不正出血があり注射法を中止し、その結果子供が1人産まれた。妊娠に気づいたときには既に3カ月だったので、月経調節法（MR）はしなかった。
- ピルを使用する人が多いのは、病院などに行かず気軽に飲めるからである。注射法は医師が村に巡回に来た際に受けるが、医師が2カ月ほど来ないことがあった。そういう時は政府のやっている病院に避妊注射を受けに行くのが大変だった。
- 夫は避妊は女性の仕事と思っている。コンドームは夫が使い方を知らず知識がないので、使用しない。
- 望ましい子供の数は2人。これは、経済的な理由からである。女の子の方が望ましい。女の子は親の面倒をよく見るし、最近はお金を稼ぐことも十分可能だから。これについては、夫も同じ意見である。
- 結婚した際に「何人子供を持つか」という計画はない。5人子供のいる人の発言として「避妊の方法をもっと前に知っていれば、子供は2人しか持たなかった」というのがあった。
- ②の離婚した女性に対して、原因は子供ができなかったことである。義父はやさしかったが、義父が亡くなってから義母が子供ができないことを責め、夫に別の妻をとるように勧めた。離婚して実家に帰ったが、婚家にいたときよりも楽しく暮らしている。
- 通常、嫁ぎ先の家族は避妊に反対であるが、最近はその有効性を認めている。特に夫が会議に参加するようになってからは、女性に対する見方が改善した。

同席していた FDV と Supervisor への質問

避妊をすることと引き替えに物品や金銭を村人に与えるという政府のやり方については反対である。避妊についてきちんと情報を理解して、健康のことを考えて避妊すべきであって、情報も与えず、物品で動機付けをしてはいけない。また、政府の役人は避妊のフォローアップ調査をしていない。

月経調節法（MR）について村人の多くが知識を持っている。また、村では中絶（違法の）は受けられず、町の個人クリニックに行かないといけないため、この村では中絶をする人はいないが、町には沢山いるという情報を持っている。違法中絶にかかる費用は、3カ月以上で 300 タカ、5カ月で 1,000 タカ。

特記事項	• 屋外ミーティングは調査者及び通訳が女性だけだったため生殖に関してかなり率直に話してもらえたという印象がある。通訳者と車の中で打ち合わせる時間があったのも良かった。 • 医師にインタビューできなかったが、月に1回の巡回で、副作用にはどのように対処しているのか尋ねたかった。特に、注射法は日本では許可されていない薬であり、人口抑制政策を実施している開発途上国以外では、認められていたとしてもあまり用いられていない避妊方法である。長期使用による副作用など、医学的な資料の入手が必要だと思う。 • 不妊手術についてもどのような医療状況で行われているのか、現場の確認が必要だと思う。
入手資料	無し

訪問先	JICA バングラデシュ事務所
面会者（役職）	坂本　隆　　事務所長 河崎　充良　事務所次長
面会日時	2002年4月3日　　15:00～15:30
面会場所	JICA バングラデシュ事務所
訪問目的	調査団報告 事務所のジェンダー主流化の取組について
調査結果要約：	

調査団報告 • 住民自身の empowerment をするのに、開発パートナー事業などは現地の要望を聞きつつきめ細かい対応ができている。 • 農村における「イスラム」色は強くない。しかし、村における男女の社会的格差は大きい。現在の支援ではほとんどが「男女別」に取り組んでいるが、男女間の情報交換のメソッドを考え出し、少しずつ男女間の取組の風通しを良くしていくべきである。 • 識字教育などの Human Resource を高めていく必要がある。 • 女性の雇用機会が広がり、現金収入が増えている。しかし、農作物などをマーケットで売買できるのは男性だけ、ということもあり、女性の収入を女性の意思によって使えるようなルートを開拓する必要がある。 • RH に関しては、専門家より現場で働くボランティアなどの方が新しいアプローチ（RH が女性の一生の健康に対する配慮であること）をよくわかっている場合もある。プロ技では、患者が女性だけでしかも産科なのである程度仕方がないが、現在取り組んでいる父親教室や、病院で働く地位の低い女性などに対する教育を更に進める必要がある。（つまり、病院でのジェンダー配慮） • 外国人でも女性が村に一人で行って調査する、ということは、村人にとってのロールモデルになる、といったプラスのインパクトがある。 • 今回は調査団長として男性の参団もあり、男性の目から見たジェンダー配慮も考察することができた。これからはジェンダー配慮がプロジェクトに横断的に反映できるよう提言したい。 • 「開発と女性」の専門家の業務量がかなり多岐にわたっている。もっとマンパワーが必要である。 事務所のジェンダー主流化の取組について • 専門家も実感として RH の内容はわかっている。プロ技のリーダーは RH が人口計画や母子保健だけの切り口ではないことを関係者にも伝えている。しかし、RH を表看板として取り組んでいる病院のジェンダー配慮については、今後も推進していくように配慮したい。 • 「開発と女性」専門家の業務は多いが、1つのプロジェクトで得た教訓を他のプロジェクトでも共有できるよう、取組の方法を考える必要がある。 • プロジェクトを実施する際に「ジェンダー配慮」を入れようと考えても、PDM にうまく指標として入れるのが難しい。どのようにプロジェクトの実施に組み込んでいくかの具体的な方策を本部は示してほしい。（これに関しては、調査団から14年度にはジェンダー指標について調査研究を行うこと、また、ジェンダーに関しては1つの指標として取り扱うのではなく、全ての指標の陰にジェンダーの指標が必要だという説明を行った） • 企画・評価部の報告書は厚くて読みづらいものが多いので、要約をつけるなどの配慮を考えてほしい。また、プロジェクト実施者が使いやすいもの、具体的な事例が載ったもの、などが望ましい。	
特記事項	なし
入手資料	なし

参考文献一覧

Women's Role in Bangladesh
WOMEN IN BANGLADESH, EQUALITY, DEVELOPMENT AND PEACE, National Report to the FOURTH WORLD CONFERENCE ON WOMEN, Beijing 1995
The World's Women 2000 Trends and Statistics, Uninted Nations
Asia-Pacific in Figures 2001, ESCAP
World Population Prospects: The 2000 Revision, 2001
The Bridge: News letter of HRDRH Project,Vol.2, No.5, 2001
Bangladesh Demographic Health Survey 2000'Trends in Current Use of Contraceptive Methods' 1975-1999
住民参加型農村開発業性支援プロジェクト　平成13年度第2四半期業務報告書
特定テーマ評価調査（南西アジア WID/ジェンダー）報告書　国際協力事業団　企画・評価部、平成11年
業務実施計画書、「開発と女性」専門家、平成13年9月
総合報告書、「女性と開発」短期専門家、平成12年7月
リプロダクティブ・ヘルス地域展開プロジェクト（第2年次）四半期活動報告書（第1，2，3四半期）、平成13年～平成14年
国際協力事業団企画部（1999）『国別 WID 情報整備調査（バングラデシュ国）』
JICA『現地国内研修概要』
水野桂子『総合報告書』平成12年7月
国連開発計画（1995）『人間開発報告書 1995 年－ジェンダーと人間開発－日本語版』
国連開発計画（2001）『人間開発報告書 2001 年－新技術と人間開発－日本語版』
世界銀行（2000）『World Development Report 2000/2001』
世界銀行（1994）『World Development Report 1994』
ユニセフ（2000）『2001 年世界子供白書』